

街の、清楚なお姉さんは、俺の前でだけ牝になる ――十年越しの再会――

完璧で清楚な珈琲店のお姉さんが、年下の前でだけ崩れていく

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

街の誰もが、三嶋詩織を「清楚な人」だと言う。

珈琲店〈みしま〉の、いつも穏やかで、隙のない、完璧なお姉さん。

——その人が今、俺の腕の中で、別人みたいに息を乱している。

閉店後の店内は、カウンターの小さな灯りだけが点っていた。磨りガラスの向こうを、最終バスのライトが一度だけ撫でて、消える。表の通りはもう静まりかえって、この時間にこの奥で何が起きているか、知る者は誰もいない。

昼間の詩織を思い浮かべる。常連の老人に微笑み、子ども連れの母親に席をすすめ、誰に対しても柔らかく、丁寧で、非の打ちどころのない女性。街の人が口を揃えて「いい人」と言う、あの完璧な微笑み。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、とろけるように呼んでいる。

「……透くん」

カウンターの内側、二人ぶんの体温だけが満ちた狭がりで、詩織がこちらを見上げた。いつも結わえている黒髪はほどけ、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついている。垂れ

気味の目もととは潤み、街に見せる涼やかさはどこにもない。
俺だけが知っている。この人の、表の顔と、裏の顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——